

家庭科

池田 美貴

1 家庭科における学び続ける子供とは

家庭科における学び続ける子供とは、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら日常生活における課題を解決していく中で、達成感や喜びを味わい、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する子供である。

(1) 「生活の営みに係る見方・考え方を働かせる」とは

「生活の営みに係る見方・考え方を働かせる」とは、家族や家庭、衣食住、消費や環境等に係る生活事象を、「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」等の視点で捉え、生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することである。

第6学年「劇的・ビフォーアフター！～めざせ、掃除の匠～」の学習では、習得した清掃の仕方を家庭に生かすことを題材のゴールに置き、題材を構成した。子供は、縦割り清掃場所や家庭の汚れ調べを通して、どの場所にも「ほこり」が存在することに気付いた。さらに、ほこりが人の動きによって作り出される事実や、ほこりの成分が体に与える影響を示した資料と出合ったことで、「体に有害なほこりを取り除いて、学校や家をより快適な空間にしたい」と特に「快適」の見方・考え方からゴールの姿を思い描くとともに清掃の仕方の工夫について考えていった。

このように、子供は、常に生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら考えを形成していく。

(2) 「日常生活における課題を解決していく」とは

「日常生活」は、日々の生活の中で繰り返される出来事や習慣、そこで用いられるものの考え方や知識、よく使う物等から構成される。「日常生活における課題」とは、既習事項や生活経験を基に生活を見つめることを通して、問題を見いだし、生活をよりよくするために解決すべきであると子供が考え、設定したものである。課題を解決するためには、生活経験や習得した知識及び技能を活用し、生活事象に当てはめたり友達の考えと関わったりしながら、自分の家庭や地域にとって最適な方法を考えることが必要である。

先の事例で子供は、家庭でもほこりのある場所を調べ、「ほこりのない快適な空間にするためには、どのような方法があるのだろう」と課題を設定した。そして、汚れに応じた清掃の仕方があることを理解し、ほこりを取り除くのに適した方法を家族に聞いたり、清掃用具を手作りしたりして、実際に学校の清掃を行い、「きれいになったから、家でも使えそう」と自信をもった。一方で、「きれいになったけれど、家では使えない」と感じた子供もおり、考えにズレが生じた。理由を問い返すと、「用具が壊れて直すのに時間がかかった」「1か所に時間をかけすぎた」と発言し、ズレの要因が「時間のかけ方」であることが分かった。ズレを感じた子供も、「確かに、時間がかかると他の場所を掃除する時間もなくなる」と納得し、「ほこりが取れて、しかも短時間できれいになる方法はないの？」と問いをつくった。そして、「時間」という解決の視点から自分の考えを見直したり友達の実践を参考にしたりして、よりよい解決方法を見つけていった。

このように、子供は、日常生活の課題について、生活の営みに係る見方・考え方を働かせながら事象を捉え直し、既習事項や自分の生活経験と関連付けながら解決方法を考えていく。

(3) 「達成感や喜びを味わい、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する」とは

「達成感や喜びを味わい、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する」とは、課題解決を通して子供が自身の成長や新しく習得した知識及び技能が生活に役立つことを実感し、生活をさらに快適で充実したものにするために継続的に実践しようとする態度のことである。

先の事例で子供は、「場所によって、手順や用具を使い分けると、効率よくきれいにできそうだ」と考えを再構築し、家庭でも清掃を行った。その様子や工夫を1人1台端末に記録した写真や動画で紹介すると、家族や友達に認められ、考えた方法が有効であったことに自信を高めた。そして、「普段の掃除でも実践してみたい」と、以後の継続的な実践に意欲を示した。

このように、子供は、見直した考えの実践を共有し、改善策を話し合うことを通して、課題を解決できた達成感や実践する喜びを味わい、実生活に生かそうと主体性を高めていくのである。

2 学び続ける子供を育てるには

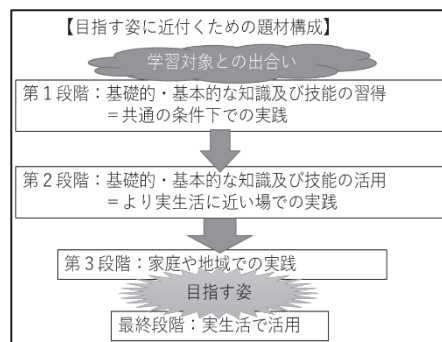
(1) 子供が必要感をもって学習対象とかかわるために

① 憧れや追究の意欲をもてるような教材を選択し、提示の仕方を工夫する

子供は、目指す姿が明確だと意欲的に課題に取り組む。そのためには、実態を把握し、子供が「やってみたい」「できそうだと憧れをもったり、「もっと生活をよくしたい」と追究の意欲を高めたりするような教材を選定する。学習対象との出会いでは、子供がゴールの姿を思い描いたり、生活の課題に気付いたりする姿を想定し、提示の仕方を工夫する。

② 対象と繰り返し関わり、自分の考えを形成する題材構成を工夫する

憧れや必要感をもち続けるためには、子供がゴールの姿に近づいているという見通しや実感をもつことが必要である。そこで、右図のように段階的に題材を構成し、段階に応じて、家族へのインタビューや日記、インターネットや資料を活用した調べ学習等を取り入れることで、子供が繰り返し対象と関わりながら根拠のある考えを形成できるようにする。同様に、課題解決に必要な要素について話し合う場を設け、子供自身が進捗状況を把握できるようにする。



(2) 子供が自ら問いをつくるために【重点】

① これまでの知識及び技能を活用する状況を仕組む

基礎的・基本的な知識及び技能を習得した子供は、それが課題の解決に本当に役立つのか試したくなる。そこで、新たな事象やパフォーマンス課題等、未解決の要素が含まれる事象や実生活に近い状況を仕組み、既習事項や生活経験を活用した考えを形成できるようにする。

② 異なる価値観をもつ考えとの出会わせ方を工夫する

上記の状況における子供の考えには、これまで形成してきた生活の価値観が含まれるため、自分の考えに曖昧さを感じたり、友達の考えに疑問をもったりして、友達に関わりを求める。そこで、ワークシートや発言等で子供の考えを見とり、意図的に子供の考えを取り上げたり、立場や生活の価値観の異なる考え同士を提示したりすることで、自分と友達の考えとのズレを感じることができるようになる。

③ 互いの考えの異同を可視化し、考えるべきことを焦点化する

子供は、互いの考えの背景を知ることによってズレの要因が分かり、「問い」をつくる。そこで、互いの考えを共有する際、考えの根拠として、生活経験を語ったり、既習事項を用いて説明したりするよう促す。また、子供が考えを説明する際、図示したり板書を構造化したりして考えの異同を可視化し、相互理解できるようにする。その上で、何が異なっているかを問いかけ、キーワードとして板書に位置付けることで、考えるべきことを焦点化できるようにする。

(3) 子供が自ら問いを解決するために

① よりよい解決方法を考え、検証する場を工夫する

子供は、「問い」が明らかになると、自分の考えを見直したくなる。そこで、自分の考えに立ち返り、調べ直したり友達の考えと比較したりして、よりよい解決方法を考える場を保障する。考えた解決方法を共有し、その根拠を話したり、先述のキーワードと照らし合わせたりすることで、解決の視点を見いだすことができるようにする。そして、実際に試したり、実物に触れたり観察したりして、検証する場を設定する。その際、それぞれの考えが家庭や地域にとってよりよいものになっているか判断できるように、生活の営みに係る見方・考え方の視点から発言を促したり、解決のための視点から検討しているか問いかけたりする。また、ペアやグループで考えを比較したり協働したりするなど、学習形態を工夫し、客観的に判断できるようにする。

② 結果を共有してねらいや日常生活に立ち返る場を保障する

検証した結果を共有し、解決方法は有効であったかを話し合う場を設ける。その際、上の図の段階に合わせて次のア、イのように手立てを工夫することによって、子供が自分の考えを再構築することができるようにする。ア：適解を導き出すために、常に課題解決の柱となる題材のねらいに立ち返る問い返しの発問をする。イ：各家庭や地域に合った最適な方法（最適解）を自分なりに導き出すことができるよう、日常生活に当てはめる場を設ける。

さらに、分かったことやもっと知りたいこと、生活に生かしたいことを書いたり友達と共有したりする場を設けることで、自信をもち、次の活動に見通しをもつことができるようにする。